

大人が読みふける児童文学①

飛ぶ教室



児童文学は子どもが読むものと思っていませんか？児童文学は決して子どもたちだけのものではありません。本当に良質の児童文学は、子どもはもちろん、大人が読んでも十分におもしろいのです。子どもの頃に好きだった物語を読み返してみるのも、人生の楽しみのひとつだと思います。親子で同じ本を読むのも楽しいでしょう。ここでは、おすすめの名作児童文学を紹介していきます。

『飛ぶ教室』はドイツの寄宿学校を舞台にした物語です。長い前書きがあつて（しかも二つ）、なかなか話が始まらないなと思うかもしれませんが、そこは心配ご無用。一章からはどんどんお話が動きだして、目が離せなくなりません。

主役の五人の少年たちは、十五歳くらいでしょうか。詩の才能をもつヨーナタン（愛称ジョニー）には両親がいません。いつも腹をすかしているボクサー志望のマティアス（マッツ）は、友だち思い。裕福な家に生まれたウーリは、臆病な自分を責めています。孤独な心をもつクールなゼバステイアン。そして秀才のマルティンは、家の貧しさに人知れず苦労しています。この五人の少年が、実業学校生とはりあつたり、それぞれの悩みに向き合ったりしながら、日々成長していく姿がいきいきとえがかれています。

『飛ぶ教室』は私が小学五年生の頃一番好きだった本で

（裏面に続く）

す。当時のダイジェスト版が実家に残っていたので読み返しました。するとたちまち時を飛び越えていました。覚えていたのです。挿し絵も、登場人物の名前も、忘れられない場面も。子どもの頃に心に沁みこんだ物語は、五十年を経てもちやんと自分の中に残っていました。マティアスが実業学校の生徒と一騎打ちをするところ。ウーリが勇気を見せようと思いきった行動に出る場面。そしてみんながクリスマス休暇の帰省列車に乗る時に、旅費が届かなかったマルティンが流す大粒の涙。五年生の自分が一緒に流した涙が、昨日のように思い出されました。その後流した、今度は温かい涙のことも。

『飛ぶ教室』には重要な二人の大人も登場します。正義さんと呼ばれる先生と、生徒たちの相談相手である禁煙さんと呼ばれる男性です。この二人の絆がもう一つの物語となっています。子どもの心をつかってくれる大人の存在がいかに大切かを思います。

ケストナーがこの物語を書いたのは一九三三年。その後ナチスによって出版を禁じられたり本を焼かれたりもしましたが、正義の心を持ち続けた人です。前書きを読み直すと、「子どもだって不運や悲しいことに合う」「どうかくじけない心をもつてくれ」と語りかけるケストナーの声が聞こえてくるようです。

（『飛ぶ教室』 エーリヒ・ケストナー作 岩波少年文庫 小学四・五年から）

児童文学愛好家 天野和子

